



# 噫道路改良會顧問床次竹二郎氏 (一)

洮 民 生

道路改良會顧問遞信大臣從二位勳一等床次竹二郎氏は昭和十年九月八日午前七時の朝露と共に忽焉として薨去された、寔に痛恨の情に堪へぬ、床次顧問と共に顧問たりし澁澤子爵は曩に昭和六年十一月十一日に薨去せられたるを以て今や道路改良會は全く顧問なきに至つた次第である。

床次顧問は大正八年道路改良會が澁澤子爵其の他の有志に依りて創立せられた當時は内務大臣の重職に在つた關係から澁澤子爵と共に同會の顧問として指導の任に當られ爾來在朝たると在野たるとを問はず今日に及んだ同會の發展は床次顧問に負ふ所もまた少くない。大正八年の春開かれ

た第四十一回帝國議會には多年懸案の道路法案が提出せられて之が議決を経同年四月一日法律として發布せられた、次で土木會議が設置せられて同八月其會議の意見を聞き、第一次道路改良事業を決定して其經費二億八千貳百八十萬圓の豫算を求むることとなつた。床次内相の之が實現に努力せられた處あるは勿論である、道路國策に關しては斯のみ依頼し置くべきものではない、國民も團結して其の貫徹を計る處がなければならぬとの意見が起り、夫れが道路改良會となつて具體化されたものだ。床次顧問が同會と淺

からぬ因縁を持つことは之れに依つて知り得るのである。筆者は聊か秃筆を呵して故人を偲ぶこととする。

故人が官界に甫めて身を投じたのは明治二十三年七月であつて同四十四年九月内務次官を退くまでは純平たる官僚として活動せられたが、大正元年春政友會に入黨して以來世を去るまでの二十四年間は政黨人として活動せられた、其の政界に在ては頻繁に甲黨乙黨と移動したるを以て故人に對する世評は頗る不快なるものがあつた、即ち或は唯の好人物たるが故に圍繞する人物に依つて絶へず動かされたロボツトに過ぎずと爲す、或は自信する所把握する信念を缺けるが故に乾分に誤れたるものである、或は日々唯一に總理大臣を夢見て政權の獲得に焦燥したるが故に却て其の目的を達するを得ざりしものであると、之れ等の觀察は故人を政界の渡鳥と嘲り、股旅者と輕し、放浪人と笑ふ者さへも生じた、筆者は敢て之を是非することを避けることとするが、床次會の一世話人高島米峯氏は言ふ「床次氏の死後世評は一變して悉く故人を賞讃するに至つた、

即ち棺を蓋ふて後、初めて故人の眞價が認められたる次第で衷心から爽快を覺ゆる。彼の大石良雄が山科に浪居して遊蕩裡に韜晦せるの際、死したらば彼は復讐の名譽を収め得ないのみか却て一の遊治郎として指彈さるる者となつたことは疑ひない所である。床次氏の政界に於ける行動に對しての批判また之れに類する所がある云々」と米峯氏の取扱つた譬喩の適否に就ては筆者は頗る其の判斷に苦しむものであるが、其の前半の感想は共鳴するに吝なるものではない。文相松田源治氏は言はるるのに「汽車の窓から富岳を眺むる時富岳の右に左に移動するが如く感ずるも之れ富岳が動くにあらず、汽車の動くものにて誠意を以て世に處せる床次氏が政黨人として屢々豹變するが如く視らるるのは氏が動くにあらず、世相の變動せるに在る」と其誠意を以て終始せられたるは松田文相の言の如きも故人は常に不動であつて世相が變移したとは無條件に贅意を表し難い、實は世相も變じたが、故人もまた變ずる處があつたと視るのが正しいのであらう、だが故人を富岳に譬へるとすれば

其の秀麗なる姿は故人の明朗な性格に比すべく、時に黒風白雨の靈峯を掩ふことあるは時に政界の妖雲が故人の身邊に搖曳して、其の性格を糺糊たらしめたにも似たるものと思はしめると言ふのが適當ではなからうか。「萬年首相候補床次の一生」と題する阿部眞之助氏の一文は所謂死者に鞭うつもので故人の行動が其死後にまでも社會を荼毒するならば死せる床次生ける阿部を怒しても餘儀ないことであるが、此の一文では唯死者を惡口するのみであつて、「巨然たる政界の大立物たるを失はざるを得た所以なのであつた」との斷定は必ず「權勢慾の旺盛なる者なれば政界の大立物となる」との非論理的な結論に到達するのに氣付かれなかつた勢であらう、夫れとも強いて望月新遞相を攻撃せんとしてのワキ師を故人に求めて此一文の價格を高かしむる意圖に出たものであらうか非か。若し夫れ徳富猪一郎氏が「床次氏は最負にしておるが何處が好いかと言はれない何んとなく好きである、詰り好きであるから好きだ」と公言した。一世の評論家、明治から大正昭和へかけての文

豪として自他共に許し而かも「近世日本國民史」を著述して時代人物を批判する蘇峯氏としての觀察は斯くの如き次第である。素より好悪は其人の自由であるから、敢て他人の彼是容喙し得べき筋合のものではないが好悪と云ふことは唯一に其人の感情の湧き出た表現である。理由は明かでないが一は好み他は惡むと云ふことは甚だ危險性を伴ふものである、而かも自己の好悪を世人に呼びかけることは最も慎しむべきことと思ふ、感情にかられて憤慨し夫れに熱情が加はると存外に大なる禍を惹き起すことが少なくない、昨の好は今の惡となり、自己の心境の變化に依つて好愛が一變して増惡となることなきを保し難い、例へば蘇峯自傳に「植村正久氏を訪ふた然るに植村氏は如何にもブツキラ棒の漢にて新島先生と相對したる氣持などは露程も出できたらず、とても斯る漢の話など聽いたとて役にも立たず面白くもあるまいと思ひ斷念してしまつた。植村氏是一種の人物にて余が斯く思つたのは後から考へて見れば皮相の見であつたかも知れない」と懺悔告白して居るに依つ

ても知られ得る如くに危ひかな感情的好惡の表現やと言ひたい思ひがする。彼の星亨氏に對する刺客伊庭想太郎氏も原敬氏に對する中岡良一氏、濱口雄幸氏に對する佐郷屋留雄氏などは悉く感情的増惡に驅られて一大不法行爲を執つたものである、世の指導的地位に在る者の言動は其理由をハツキリとせず唯感情的好惡を表現することは深甚なる戒心を要することと思はざるを得ない。

故人に對する世評は大體前叙する所の如く頗る區々に涉り棺を蓋ふても尙事定まらず故人の眞の姿を知るに苦しむものあることを痛感せざるを得ない、依つて筆者は幾分でも故人の眞の姿を認むるに足ると思はるゝ故人の言行に就き思ひ出の儘を記述しせめては故人の恩顧に對し萬分の一を報じたいと志すものである。

故人が政治界に身を投じてからは少くとも世相の變轉する状態を考量し時勢の動向を洞察し正を履みて嚮ひ、中を執つて行はんことを志して行動したる跡は見られないではないが、一面では殆んど常に自己を韜晦して恰かも煙幕を

張るが如くして多くの反覆常なく主我的な政界人に對して眞の姿を現はさざらんことに苦心したることあるをも見らるのである、又明治二十三年甫めて官界に入り大藏系統から内務系統に移りて宮城縣參事官となり、岡山に山形に新潟に兵庫に東京に轉々として警察部長内務部長に職を奉じ徳島秋田に知事として地方の政治に従ふたるの間は官僚としての修養時代とも視らるゝのである、されば此前後の時代に關しては暫らく之を差し置き専ら内務省地方局長となつて中央政府に身を轉じ進んで内務次官となり公然政友會に参加したるまでの間に於て大望を懷きつゝ一大政治家たらんとする鍛鍊時代とも言ひ得るの時代即ち將に大に飛躍せんとして眞摯な心構を以て人格識量の修養、施政の要諦宇内の形勢洞察等諸方面に涉つて汎く深く修練する所があつた時代は其態度は明朗に、心情は純眞に、言行は公正に、身を持つること謹嚴であつたと思はるゝ、依つて此時代に於ての故人の言行を檢討し、斯に其の眞の姿を見出さんとするものである。

故人が局長として就任せられた三日目である、政友會の首腦部のNと云ふ先輩から「今度の床次と云ふ地方局長はどんな人物かネ」と尋ねられた、筆者は言下に「將來は大匠となる器量人と思はる」と答へたが翌朝N先輩は「昨夜原君（内務大臣原敬氏）に逢つたから床次の事を問ふて見たが官吏としては出色のある人物だが、まだ海のものとも山のものとも判らぬ大臣にはどうか、とにかく將來のある人物だと言はれた」と話されたことあるを思ひ出すのである、此原内相の所謂將來のある一地方局長は果して如何なる心構をもち如何なる足蹟を遺したか之を檢討する時に評者各人の床次でなく、床次の床次たる姿がハツキリと浮び出さるる、而かも後に政治家としての行動態度が如何なる意圖に出てたるかを認識し得る資料を見出すであらう。

西園寺内閣が成立し原敬氏が内務大臣となつた、原内相と尤も親しき友人である吉原三郎氏は地方局長から内務次官に轉した、そこで徳島縣知事から秋田縣知事に轉任を命ぜられ、其赴任の途次東京に滞在せる故人は月の十七日

吉原氏の後任として地方局長に任命せられた。原内相も吉原次官も故人とは左程の交はなかつたから官界の豫想を裏切つた此任命沙汰は省の内外に意外の感を興へたことだが其何人の推輓に依つて斯くなつたのか天機を洩らさぬこととする。兎にも角にも水野鍊太郎氏や井上友一氏や犬塚勝太郎氏などが後輩とは云ひながら既に己に内務省に先任して居る、未だ曾て内務本省に在職したことのない故人は省内を通して殆んど親しき者なく孤影悄然たるの有様で、其環境は決して樂天地ではなかつたのであらう、特に日露戰役後の「戰後經營」として民力涵養國力充實の叫びと其方策が高調せられ、省内は緊張氣分が旺盛しておつた、就中地方局では井上友一氏が府縣課長として中心となり地方事業經營の振作、勤儉貯蓄の獎勵、社會事業の啓發、公有財産の利殖方策等の如き政策を計畫し之か實現に局員を擧げて奮勵して居るさ中である、中央政府の施政振に經驗なき故人は相當苦心し、忍耐し、努力して歩調を一にすべく大に意を用ゐたことだ、内、家政の豊かならざる事情があつて

清子賢夫人に由つて後願の患少なりしを得たとはいへ、故人の性格は家政に關しても深き注意を怠らなかつた、實に勅任官としての生活振としては其衣食住は決してふさわしきものでない。否、寧ろ貧弱であつたが故人の強い責任感に敢て粗衣粗食に甘んじ涙ぐまじきことも屢々見受けられたものだ、斯様な境涯の裡に他日の願望を成熟せんとして努力せられた、夫れで局長時代に鶴崎鷺城君をして次の如く評せしめたものだ——床次は少壯官僚中の大器を以て目せらる彼は伊集院彦吉、山内一次と共に成績優等を以て同時代に卒業し、鹿兒島の俊才として在學時代より儕輩の間に推重せられぬ、由來吏臭の最も紛々たる内務の官僚中獨り床次は屬僚的臭氣を脱して仙骨を帯び茫洋として大所あり、故に飽くまで書生的にして大概の事務は之を下僚に任し煩瑣なる干渉をなさず、去りどて彼の盲判は眞の盲判にあらず、唯だ大袈裟なるを嫌ひて兎角簡單なる流儀を尙ふのみ、嘗て埼玉縣を巡視して某地に次するや、一郷を擧げて之を歓迎し、其旅館には時の知事大久保利武を筆頭と

し郡長、町村長、警察署長等威儀を正して取り卷き、查公は座敷の入口に見張をなして出入毎に擧手の禮をなすの有様なれば簡單流儀の床次は煩に堪へずして查公を追拂ひ、忽ち洋服を襦袢に着更へ、胡坐して且飲み且つ談せり、蓋し彼の仙骨と無頓着とは畢竟禪的修養より來れるが如く、彼に禪的修養を奨めたる者は前の新潟縣知事勝間田蝶夢なりとす、地方官の初期時代の彼は誰彼の容赦なく議論を吹き懸け、縣會に於ても田舎議員をして屢次喧嘩を爲し、隨て地方政務の圓滿を缺くことありしが、後ち新潟縣書記官たりし時勝間田は大に之を誡めたり、勝間田は恬淡洒落たる詩人肌の人物にして床次は深く其人と爲りに推服したるが故に彼の新潟縣より兵庫縣書記官に轉するや、京都大徳寺の和尚を聘して參禪を始め、其後知事として各任地に至るの後も禪を修めれば、嘗て圭角稜々たりし彼は渾然圓熟せる人物と化せり。殊に短年月の間に頻々轉任を命せられたるの一事は旅裝を整へる上に簡便主義を執るの必要を感じしめ、終に自ら性となりて今日も其流儀を實行せらる

し、近年彼は少壯官僚の中心點となり、頭腦政治を排して人物政治を主張し、將來後藤新平を其一派の頭目に載かんとするの意ありと傳へらるるも、彼は鷄鳴狗盜の雄たる後藤輩を崇拜せざるべく、去りとて彼を大臣の器なりと評するが如きは餘りに煽て過ぐるの嫌なからず、要するに彼は一木、柴田、仲小路の如く頭腦一天張りの人にあらずして、人物の人なるべし——と此評言全部が眞に觸れたりと言ふを得ざるも中らずとも遠からずとの感は禁し得ないものである。鷺城君が故人と勝間田氏との關係に言及せるか重復を厭はず再言する、實に故人は勝間田氏に對しては常に感謝し敬服したるもので、其慇懃は衷心から湧き出てたる真情である。此勝間田氏は名を稔と稱し山口の藩士で明治十八年愛知縣令となり後愛媛宮城新瀉等に牧民官としての經歷がある、明治三十九年一月三十日六十五歳を以て世を終つたが、資性坦壤にして文才があつた、岫雲又は蝶夢と號し最も漢詩に長した、中井櫻洲、西村醉處とは尤も深交があつた、當世の一奇人と稱せられた人物である、故人

が宮城縣參事官となつた時に己に同縣の知事であつた、此勝間田知事が甫めて故人と相見るや其偉材を認めて指導扶掖に意を用ゐたことは故人の時折追懷して談られた處である、故人が岡山、山形に累進し明治三十一年二月二日に新潟縣書記官となり翌三十二年四月八日兵庫縣書記官に轉するまでの間また勝間田知事の部下であつた、勝間田氏と故人とは淺からぬ因縁をもつた間柄である、故人が同氏を敬慕するの情切なるものありしは故なきことでない。

故人が地方局長時代即ち明治三十九年一月から内務次官となるまでの約六年間に於ての日常の坐談公開した演說其他の意見行動等に付き其本領とも見らるる所を案するに第一に耐忍力を涵養せられたことである、鷺城君が言はれた如く宮城縣參事官時代は談論風發相手の何人たるを問はずよく論談した、而かも疝癢が強くて部下の屬僚は手ひどく叱り付けられたものだ、當時其部下にあつた二三の縣屬から筆者は親しく聞かされた然るに地方局長時代は己に修養を積まれたので其の疝癢は家族の外には殆んど見受けられ

なかつた、故人が日夕先考の寛容な度量を偲はれては種々の物語りをせられたことも耐忍力の涵養に意を用いた證左である、斯く耐忍力を涵養せられたればこそ設下部下に失策があるも唯之を再ひせぬ様にと注意を加ふる止まつたことである、夫れで部下は其寛容な温情にはいたく敬服したものであつた。次には信任主義を把持されたことである、故人は常に大局高所から事物を觀察して判斷を下し小刀細工を用ゐることを甚しく厭惡した、轉々として任地を變ずるも曾てつれ子を伴ふことなく、新任地に於て其處に部下の長所を看取して克く之に任した、局長となつては日常の事務は殆んど府縣、市町村兩課長に一任して敢て干渉せず一人の前任地より伴ひ來つた者もなかつた。又敢て偏重偏愛の仕振を爲さなかつたから新しく上長官となつても誰れ彼れの別なく親しまれたものだ、後に政治家となつても矢張此主義の下に行動したから苟くも故人に親みを得た者は皆夫れく己れのみが特に信任せられたかの如く感じたものと思はるゝ事實がある、斯様な風であるから如何に好愛

した者でも無理矢理に之を引立てゝ位地を與ふると云ふが如き世の親分が乾分に對する依怙最負の沙汰に出られたことは斷じて見られない、其處に部下としての物足らざるを感せしめたものだが又多數人を引付ける力があつたのである。故人の信任主義は夫れに依つて他を強要しなかつた、故に親しみ來る者は喜んで之を容れて信任するもその去る者は去るに任せて敢て之を追はず實に悵懷なもので、去る者に取つて時に冷淡過ぎて不人情の感を懷いた者もあつた様である、曾つて故人の官舎に寄寓した山本實彥氏が遠く北米に遊び彼のワシントンの碑前に詣でし際、其偉人の風手を仰ぎ遙かに思を故國に馳せて故人の徳を偲び歸朝後政界の寧馨兒として甚しく故人を賞讚したことであるが、其後故あつて兩者間に意思の杆格を生じ山本氏は政敵となつた、其際筆者は親しく復舊を奨めたが「山本の去るのは山本の考へであつて、どうにもならないぢやないか」と一言せられた、政黨を變轉する毎に其同志を喪ひたることも或は此恬淡過ぎたことが禍ひしたものではなからうか。